にとっても大切なものであります。この大切な気持ちをはっきりと言葉で表すことが出来るように、只今の青年のように最大難関の大学入試に自然にほとばしり出て来る――青年にとって、お題目は正に自分のものであるわけでありましょう。私共はたゆまず努力・精進を重ねて日々の保育にいそしんでいるものでございます。そうしてこの努力・精進が子供の心の中にすくすくと若木の如く伸びる事を念願している次第であります。

青少年問題を考える

丸井良光
（兵庫・妙福寺住職）

青少年問題を考える、ということで参加させていただきましたが、今日は、「心を育てる教育」を中心に、私の教職経験を通してのお話しを申し上げます。

現代っ子を表現する、「五無主義」という言葉があります。無気力・無感動・無関心・無責任、その上、不作法であるということです。最近、さらに「依頼心が強くて甘ったれ」で、おまけに「直ぐ怒る」という傾向が加わってきたのです。

また、自殺願望の生徒が増加してきているという、実に憂慮すべき事態が発生しているのです。

今年になってからも、中学校の先生に聞いてみたのですが、やはり、作文の中にそのような考え方がみられるし、その傾向が感じられると言っています。

何故、子供達が自殺願望をするようになるのでしょうか。それは、自分の周囲の大人たちをみて失望しているのです。

「大人は大うそつきだ。良いかっこうばかりしている」、そういう大人社会への不信感が自分の将来に不安を感じ、夢も希望も実現できそうにない、そういう世界へ自分は入っていきたくない。だから大人になる前に、自分を消してしまいたい、と自殺への道をまさぐり、やがて、日常の些細なことでも、自殺へ踏切る引金となってしまうのです。

子供たちの純粋な目と心に、大人たちの世界は、このように醜く映っている事実を、厳粛に受とめねばなりません。

自殺まで至らなくても、非行に走る生徒が激増しているのです。五十八年度は、前年度の四倍という非行数がそれを示しています。その原因は、多様にわたっていますが、大きな原因として、「授業についていけない落ちこぼれ」によって、ドロップアウトしてゆく、というケースが多くみうけられます。

そして、そこからくる「劣等感と心の不安感」が、将来への自信を失わせ、人間性までもゆがめさせて、非行へ走る大きな要因となっています。

今の学校では、成績やテストで、人間性までも評価している点取り競走が行われています。これが学校という場を、楽しく感じることのできない不安定なところとなってしまっているのです。

暖かい友人同志としての連帯よりも、お互いの競走が課せられているわけですから、成績が下がってくると、自信を失い、不安と劣等感しか残らないのです。そういう少年・少女たちが、同じ挫折感の中から結ばれて、非行集団をつくってゆくのは、当然の結果といえるのです。この知識偏重や偏差値中心の考え方を、学校も、保護者も、まず改めてゆくことが必要となるのです。

では、心の不安をとり除いて、ドロップアウトをくい止めるには、どうすれば良いものでしょうか。

今の時代は、何でも手に入り、恵まれ過ぎて感謝の心が育ってゆかないのです。多様化している価値感の中で、何に価値があるのか見出すことが出来ないのです。そこで、感動を忘れ、シラケている子供の心を、ゆり動かしていく、「心に感動を与える教育」の指導が是非とも必要となります。

五月の第二日曜日、母親にカーネーションを捧げる習慣が日本にも伝わり、生徒は小遣の中から、当日たいへん高価になった花束を贈るのですが、もらった母親は、喜ぶどころか、その代価を聞いて、「もったいない事をして」と反対に叱られるケースがよくあります。この母の

日のあり方について、考えさせていくのです。

「お母さんに本当の感謝の気持を現わすのに、多額のお金が必要なのだろうか。……その日は、何か、家事や用事を見つけて、手伝ってあげればどうだろう。女の子だったら前日から計画して、『今日は私がするから、お母さんは、ゆっくり休んで下さい』と炊事を引受けてはどうだろう。お母さんにカーネーションのプレゼントより、もっと喜んでもらえるのではないだろうか。また、おばあさんが居られたら、『肩を叩いてあげようか、足を揉んであげようか』と声をかけてあげるのだ。なぜなら、おばあさんは、母の母親なのだから。たとえ、その時間は短かくても、暖かい、いたわりの心に、涙を流して有難うと言ってもらえると思うが、どうだろう。やってみようとは思わないか……」

そして、母の日が過ぎ、金銭で買えない何かに感動し、真の喜びを味わった生徒達は、やがて何に価値があるかを知り、そのような考え方に目覚め、連帯感の中で同化していくようになってくれるのです。

又それが、学校生活の中でも「成績が悪く、どんくさい友や、親を失っている友人」のような、ハンディをもちながらも、それを乗越え、健気に頑張ろうとしている友人に、暖かい目で接し、励まし、みんなで協力して明るいクラスをつくり上げていこうとする慈愛の心を育てていくようになるのです。

ほとんどの小中学校で給食が実施されています。ところが今の子供はぜいたくで、あれが嫌だ、これがおいしくないと言って食べません。給食指導は行っているのですが、それでも食事が終りますと、残飯がポリ用器の中に沢山捨てられるのです。私は午後の授業に給食室の側を通って教室へいきますが、その時に、次のようなことをよく言いました。

「先生は、あの残飯をみるといつも思うんだ。他の国では、君たちと同じ年代、いやもっと幼い子供たちが、今、飢えで苦しみ死んでいるんだ。飢えていくのが一番苦しく、悲惨な死に方なのだ。バングラデッシュ・パキスタン、アフリカなどの国々では、食べるものがなく、

栄養失調の果てに今日も死んでいこうとしている。その子供達に、送ってやれるものならば、君たちが、おいしくないと言って捨てた、あの牛乳を一口でも飲ましてやりたい、せめて死ぬまでに一回でもいいから、あの残飯をお腹いっぱい食べさせてやりたいと、涙ぐむ思いがする。幸いにもこんな豊かな国に生れて、何でも物があふれているから何も思わないだろうが、これが当り前だと思ってはいけない。有難いことだ、勿体ないことだ、と思わないのか。そう思うならば、何かしてあげることはないか、何かしてあげようと考えて欲しい」

と思いやりの心を引出し、感動に呼びかけ育んでいきますと、シラケテいるような生徒達も、エンピツ一本運動などによろこんで参加し、難民救済募金に小遣を進んで差出すようになってきます。

自分が「役立っているのだ」という自覚が、自分の存在価値を見出し、やがて自身に誇りと、自信をもつ人間に成長してくれるのです。言いきかせるのではない。「学ばせるのだ」、これが教育の原点です。

「馬を川へ連れていくことはできるが、水を飲ますことは出来ない」。水を飲むのには、馬の意志が働かねばなりません。

本当の人間の価値とは、本当の人間関係とはどうあるべきかを、よく考えさせ、「やる気を出し、行動に移させる」必要があります。

甘ったれで、依頼心が強く、自分の将来に不安をもち、大人たちへ不信感をつのらせている子供たちに対し、自信をもって指導し、夢と希望を与えてやることこそ、人生の先輩としての私たちの責任でありましょう。

生徒指導主事として、ある教育困難校へ六年間勤務したことがあります。まともな窓ガラスは半分くらい、朝礼にも三分の一の生徒が集まって来ないという荒廃した学校でしたが、三年後には、見違えるような学校に生れ変りました。その変革中も、生徒から暴力をふるわれた事は一度もありませんでした。

どんな手に負えない生徒も、忍耐と根気で接し、暖かい心で指導してゆけば、その愛の波動は生徒の心に慈雨

のごとく浸透していくのです。

教師の生活は、外部からみるより、はるかに厳しく、ほとほと手をやく生徒も存在します。教師も人間ですから時にはいやになって、「俺の子でなし、孫でなし、もう見放した」という気持になることもあるのです。

私は、先生方に「他人の子と思ってはいけない。自分の子だったらどうするのか、弟や妹でも放っておくのだろうか、身体障害者が肉親に居たら、絞め殺してしまうのか。そんなことをする筈はない。『何とか生きていける手だてを尽くしてやりたい』と考えて、『自分の命が短くなっても、自活するようになってほしい』と、神仏に願かけさえするのではないだろうか……人の子供やと思わずに『みんな可愛い自分の子供』と考え、手古摺る生徒も、『不憫な我子だ』と思っていこうやないか。反抗され、裏切られ、悲しくて、空しくなってしまうことがあるけれども、表面だけで指導するのではなく、家へ帰ってからも、『祈ってやろう』やないか。祈りは、きっと氷のような、かたくなな心を溶かし、いつか呼びかけの声に耳を傾けてくれるようになる。それを信じて、あきらめずに頑張っていこう」とよく言ったものでした。

私は、「祈りの心こそ、教育の原点」であり、祈れば必ず通じると信じています。

子供の心は純粋なので、親や教師・大人のうそを見抜く、するどい直感と目と心をもっているのです。「たてまえではなく、本音で接していかなければ」、信頼を失って、とりかえすことの出来ない断層をつくってしまいます。

「教えることは、教えられること」の自覚をもたない限り、人間の指導は不可能に近いと感じているものです。

日蓮大聖人は、「教主釈尊の出世の本懐は、人の振舞いにて候けるぞ」と示されております。

今みられる現代っ子の姿こそ、現社会の投映であり、大人の心の反映――諸法実相であるを知覚し、次代の継承者である青少年に対し、真剣に取組まねばならぬ時は今をおいて外にはないと考え、直ちにアクションを起し、異体同心、この世の浄土の実現目指して、共に手を取り